



# 序 論



## 序 論

風・火・痰・瘵、これら4者は中医学における重要な概念である。なぜなら、風・火・痰・瘵は様々な疾病を引き起こす病因であり、病機<sup>\*1</sup>においても中心的役割を果たす物質であると見なされているからである。

これら4者には共通する特徴がある。

(1) 人体を単独で、あるいは複数で傷害する。

(2) 互いに転化する。

(3) 病因や病理を表す概念であるとともに、病名にも使用される。

風・火・痰・瘵について、中医学の考え方を簡単に紹介する。

風と火は、ともに六気<sup>\*2</sup>の1つであり、ともに陽に属することから、「風火同氣」のような両者の関連性を示唆する言葉がある。風火は〔風火以外の四気も〕過度に存在すると六淫の陽邪に変化し、病因として直接あるいは間接的に人体を傷害する。

痰と瘵は人体で作られる病理産物であり、ともに陰に属することから、古人は「痰瘵同源」と称した。痰、瘵が発生した後、適切に対処しないと、両者は新たな病因として人体をさらに傷害する。

『素問』風論には「風は、百病の長なり」とあり、劉河間<sup>\*3</sup>は「火による病は、被害が非常に大きく、変化は激しく、その勢いは非常に強い」と述べている。後世には「怪瘵〔難病・奇病〕に痰多し」「怪病に瘵多し」などの記述も見られる。これらの言葉は、人の健康に対する風・火・痰・瘵の危険性や、発病が広範囲であることを示唆している。まさに風・火・痰・瘵は疾病の「四大因子」として徹底的に探究すべきテーマである。

次に、まず風・火・痰・瘵の概論を述べ、そのうち風証・火証・痰証・瘵証についてそれぞれ項を設けてくわしく論じる。

- \* 1 病機：疾病の病因・病位および疾病過程における病理変化の原理。
- \* 2 六氣：風，寒，暑，濕，燥，火の6つ。厥陰風木，少陰君火，少陽相火，太陰濕土，陽明燥金，太陽寒水を指す場合もある。筆者は後者の六氣をイメージしているようである。
- \* 3 劉河間：約1120～1200年。金代の医学者。本名は劉完素，河間は別名。『内経』を重視し、『素問玄機原病式』『素問病機氣宜保命集』『素問要旨論』『傷寒直格』『傷寒標本心法類萃』『宣明論法』『三消論』などを著す。彼は、辛燥法が当時の流行病に対し無力であったことから、病因としての火熱に着目し、熱性病の治療原則をまとめ、辛涼解表法と瀉熱養陰法を発表した。彼は明清時代に現れる温熱学派の基盤を築き、寒涼派の提唱者として評価されている。

## 1 風火痰瘵の起源とその病理変化

### 1 ……風

風は外風と内風に分けることができる。外風とは四時八風不正の邪<sup>\*1</sup>を指し、人体の正気が不足し腠理<sup>\*2</sup>が開いていると、容易に人体に侵入する。外風は人体に侵入した後、ほかの病邪と結びついて風寒，風熱，風濕，風温などの病証を形成する。これに対し、内風は人体の病理変化によって発生する風邪であり、なかでも肝木から生じることが多い。『素問』至真要大論は「諸風掉眩<sup>\*3</sup>は、皆肝に属す」と指摘している。ちなみに風を生じる病機には肝陽化風，熱極生風，血虚生風などがある。また『素問』風論は「風が人を傷害すると、ある人は寒熱<sup>\*4</sup>を生じ、ある人は熱中<sup>\*5</sup>を生じ、ある人は寒中<sup>\*6</sup>を生じ、ある人は瘳風<sup>\*7</sup>を生じ、ある人は偏枯〔半身不随〕を生じ、ある人はそのほかの風病を生じる。すべて風に起因するが、病理変化・病名はそれぞれ異なる。なかには五臓六腑に進むものまである」と指摘している。これらの記述により、風証の発生とそ

の変化の概要をおおむね理解でき、また発生のメカニズムの異なる内風・外風の存在をうかがい知ることができる。

- \* 1 四時八風不正の邪：季節はずれの風，あるいは過度に旺盛な風。四時とは季節を指す。八風とは起源の異なる8方向から吹く風邪の総称。
- \* 2 腠理：皮膚・筋肉のきめ，あるいは皮膚・筋肉間の結合組織。
- \* 3 諸風掉眩：風邪が引き起こす諸症状〔いわゆる風証〕とめまい。
- \* 4 寒熱：悪寒・発熱が現れる疾病。
- \* 5 熱中：肥満したものが風邪を感受すると、腠理が緻密なため，外邪が排泄されず，胃を侵襲すると，目黄が現れる。これを熱中という。
- \* 6 寒中：体質虚弱なものが風邪を感受すると，腠理が粗いため，陽気が外に漏れ，寒冷や流涙が現れる。これを寒中という。
- \* 7 瘳風：風邪が脈中に入り営血と結合し化熱する。すると血や気が汚され，鼻梁は崩れ，皮膚に潰瘍が生じる。これを瘳風という。現代の癩病に相当する。

### 2 ……火

火は「五行」の1つであり、「六氣」〔六淫〕の1つでもある。火には生理的な火と病理的な火があり、生理的な火には少火<sup>\*1</sup>，君火<sup>\*2</sup>，相火<sup>\*3</sup>，命門火〔腎陽〕などがある。いずれも人体の生命力の源となる物質である。ただ生理的な物質とはいえ、過剰に存在すればやはり病理的側面が現れ、かえって人体を傷つけてしまう。たとえば、「壮火食気」<sup>\*4</sup>や「相火が陰を損なう」などはその例である。病理的な火も、風と同様、外火と内火に分けることができる。外火は主に六淫〔風，寒，暑，濕，燥〕の化火<sup>\*5</sup>により発生し、内火は陰虚陽亢により発生する。また五志化火<sup>\*6</sup>も内火の範疇に含めることができる。火の病原性については『素問』至真要大論の病機19条<sup>\*7</sup>が参考になる。19条のうち4条が熱により発生する症状のグループ，5条が火により発生する症状のグループである。

- \* 1 少火：人体の生命活動を維持する陽気。
- \* 2 君火：心火，すなわち心の陽気を指す。心は君主の官であることから